

生命・医療倫理と行動科学

健康と病い、生と死について、真に「医の立場」から哲学されていたのは、故中川米造先生であった。本来この巻頭言は中川先生が書かれる予定であったが、御逝去のため、代わりに第12回大会の会長を務めた筆者が書くことになった。生命倫理と行動科学は、中川先生が身をもって実践された課題であったと思う。本号は追悼号ということもあって、先生のお人柄に触れながら「生命・医療倫理と行動科学」というテーマに重ね合わせてみたい。

中川先生は常に人間の全体像に立たれておられた。たとえば、QOL (Quality of Life) が、一方の医療の面では、「生活の質」と訳され患者の幸福度の基準と考えられている。他方、QOL が倫理の面では、「生命の質」と訳され死の判定や臓器移植にもつばらかかわって問題とされている。中川先生は両方の立場からいつも考えておられた。人間の全体像をめぐって、前者では医療社会学として、後者では医の哲学として先生の学問的業績が結実した。

両者の総合や、生と死・健康と病いの総合の立場を理解してこそ、どちらの立場の意味も十全に理解できる。したがって「生命の倫理」の理解には死の倫理の理解が必要であり、「行動の科学」は無行動（無為）の反省によって把握できることに気づく。前者を背後で支えているのが後者である。つまり、生命の倫理を考えるには、死の概念が確定しておらなければならず、どのように行動すべきかを考えるには、一度行動を停止して現実から距離をおかなければ行動につながる意思決定という方向づけができない。中川先生は、病いや死を克服すべきもの、戦うべき相手や厭うべき相手であるとするのではなく、健康や充実した生が成り立つにはある意味でそれらは不可避で受け容れるべきものであると考えておられた。だからこそ、先生はあのような完璧なまでの「生」を全うなされたのであろう。

そのような総合の立場に立ち得ていた中川先生は、常に他の人に優しい人であった。反対の意見をも認めつつ自己の見解を述べられることがしばしばであった。これは現実の生活や学問的議論の場における「広い意味」でのインフォームドコンセントであったといえよう。

また中川先生は、相手の立場も十分に認め相手の素質を生かす人でもあった。言葉を換えるなら、相手の自律や権利、そして自己決定権を身をもって認める人が中川先生であったといえる。先生との議論や対話においては、お互いが自律しその立場と権利を尊重するからこそ、パターンリズムの問題も慮外で、ユーモアの雰囲気のみが生じるのである。そのような暖かい環境では、医療倫理もあえて問題とされることもなければ、どのような行動をとるべきか(行動科学)も考える必要はなくなる。しかし、現実の医療現場ではそうではない。そのため中川先生は「医学」についての批判をその使命とされた。

こうして中川先生は、ある意味で、その人生のなかにおいて生命をめぐる「医療倫理と行動科学」を理想的な形で実現されていた。しかしながら、それは、現状の医療界を見ると、まだまだ個人の次元にとどまろう。医療倫理は、患者と医者という単純な人間関係だけでなく、患者自身も含めて医療関係者すべての意思決定とその行動にかかわるからである。したがって価値多元的な現代社会において、生命・医療倫理と行動科学について考えることは、新たな医療倫理基準と行動指針のための「対話による合意形成」の場となるネットワークをつくることでもあろう。

谷口文章 (甲南大学文学部)